絆がつなぐ、人の温かさに触れた一週間

▼慶応義塾大学（東京）の学生が日野町で田舎の暮らしを体験

都市と地方の人材交流を基本に、都会育ちの若者が田舎の暮らしを体験し知り得た地方の実情を、今後、社会人として生かすことを目的に、慶応義塾大学商学部などの学生6人が、7月29日から8月3日まで町を訪れました。

期間中、学生たちは移動販売や地域医療、たたらの楽校などを視察したほか、小中学校、高校の児童生徒やーターン移住者と交流を深め、都会とは違った暮らしの中で、地方の持つ魅力や支え合いで生活する姿を肌で感じ学びました。

また、学生らは町内の家庭に2泊し、交流。それぞれの家庭で実際の田舎暮らしを体験した学生は「温かさに触れた」と話しました。

日常とは違った生活を体験し、生きる力を

都会で育った若者たちが田舎暮らしを体験しようと、7月29日から8月3日までの1週間、日野町を訪れました。

今回訪れたのは、慶応義塾大学商学部などの学生6人で、移動販売や地域医療など、少子高齢の進む町の現状を学んだほか、地元の小中学生、日野高校生、住民と交流し、刺激を与え合いました。

さらに、1週間のうち2泊を町内の4家庭に分かれてホームステイ。昼間は視察に出かけるため宿泊のみとなりましたが、直接住民とふれあい、共に食事を取りながら、日野町での暮らしについて話を聞くなど、交流を深めました。受け入れた家庭では「楽しかった」「若者と話ができて良かった」「またいつでも来なさい」と再会を希望しました。

今回、日野町での体験学習が実現したきっかけは、有限会社安達商事代表取締役の安達享司さんと慶應義塾大学商学部教授、中島隆信（なかじまたかのぶ）さんが懇意で、中島さんの「学生に、都会とは違った体験を通して人間力を養い卒業してほしい」という思いを日野町で実現できないかと、安達さんが景山町長に相談したことから。

景山町長は2度、慶応義塾大学へ訪問して打合せを行い、受け入れを決めました。町と中島さんは、今年度のみに限らず、今後、継続的な交流を目指しています。

生きる力を養い、たくましく成長してほしい

慶応義塾大学　商学部教授　中島隆信（なかじまたかのぶ）さん

まず、ホームステイ先の皆さんが、「楽しみにしている」など快く受けていただいたことに安心し、感謝いたします。ありがとうございました。

さて、今の大学生は与えられているものを消化しているだけで、自分で自分を追い込む機会が少ない現状です。人と人のつながりが強く、支え合って生活している日野町で研修できることに感謝しています。都会には少ない深い人間関係を体験し、生きる力を育み、何かができるようになったというのではなく、人間的にたくましくなった姿が見たいと期待しています。

日野は自然と共存し、美しい町ですね。根雨を歩きましたが、いたるところに水路があり癒されました。また、町の人がみんな知り合いで、町民と行政の信頼関係が厚いところのように感じました。今後もこの研修を継続したと考えています。皆さん、よろしくお願いします。

鳥取県西部の模型を見ながら説明を受ける（菅沢ダムにて）

日野町での研修に意欲を見せる学生の表情は輝いていた

生活体験合宿中の小学生と交流を行う

7月30日（月）

安達商事の移動販売を視察 高齢者の声を聞く

買い物に訪れた高齢者に話を聞く学生

中山間地で『移動販売』という営業形態で奮闘する有限会社安達商事（安達享司代表取締役）。移動販売に同行し、訪れる高齢者の皆さんと触れ合いました。

初めて見る移動販売車に学生は興味津々。車内に所狭しと並べられた商品の品ぞろえや保冷設備に驚き、写真に写す学生の姿も見られました。また、学生らは買い物に訪れた高齢者に積極的に声をかけて交流。高齢者は「移動販売は生活に欠かせません。私たちの生活に必要なものは何でもそろっています。毎回、来るのが楽しみですよ。足りないものは電話をしておけば、用意してくださって、本当に助かっています」と話します。利用する人の生の声を聞くことができたことは、学生にとって良い体験になったようです。

移動販売視察後には、役場で、有限会社安達商事代表取締役の安達享司さんと意見交換を行いました。

まず、安達さんは「地域の食、雇用を守るために考えたのが移動販売でした。顔の見える相対の商売が基本。愛と人で売っています。人が変わると売れなくなってしまいます。東日本大震災で『絆』が再認識されている今、移動販売はこれから注目される」と熱い思いを話されました。

学生らは「移動販売がないと生きていけない人がいることを知って、今の自分たちの暮らしが当たり前ではないことが分かった」「高齢者の皆さんのまぶしい笑顔を久しぶりに見ました」など活発に意見交換しました。